

市民の森(吉田山)の昔は？

市民の森となった吉田山は、昔は地域の人たちとどのように関わってきたのでしょうか。

里山だった

昔から吉田山は、この地域の人たちの生活を支える大切な里山でした。明治のころからは、^{はいばらだ}埴原田財産区と^{いもじや}鋳物師屋財産区の共有の山林として、大切に管理され、利用されてきました。生活に欠かせない大事な資源ですから、持続可能にするためのルールがありました。

山全体のうち、手入れをする場所、すなわち利用する地域を決めます。その地域を区分けし各戸に割り当てます。各戸は、薪、^た焚き付けにする柴を取ってもよし、炭を焼いてもよし、^{かりしき}刈敷(注)として使用する枝葉の採取もここで行います。ただし、なたで切る程度の小径木であって、のこぎりで切るようなのはだめというような約束事があったようです。

この利用地域を順繰り替えていくことで、山全体が手入れされ、持続性が維持できました。ルールに基づいて利用すること、それが里山を維持することであり、健全で災害に強い里山を作っていた訳です。

現在の埴原田から吉田山



里山はどこへ？

生活様式が変わると、薪、柴、炭も使わなくなります。田畑の肥料に化学肥料を使うようになると、里山の若枝、落葉も不要になります。そうすると、里山に人が入ることもなくなり、里山は人々の生活から遠ざかって行きます。

吉田山も同じです。そんなときに、ゴルフ場の開発が浮上してきました。この経緯は、米澤村史の「吉田山の観光開発」の記述を見てみましょう。

吉田山の開発

昭和四十年代中ごろ、全国的な観光開発がおこなわれるなか、米沢地区でも、塩沢・北大塩・鋳物師屋・埴原田のそれぞれの区において観光開発がおこなわれた。

埴原田では昭和四十七年十二月、東京の帝国観光株式会社の「吉田山にゴルフ場を中心とした総合開発をおこないたい」との呼びかけに応じ、吉田山開発に着手することになった。

以後、所定の手続きを踏みながら、同社と賃貸契約を結んで開発を進めるうち、昭和四十九年に当地方一帯を襲った集中豪雨によって、吉田山の土砂が流出する等の災害が発生し、復旧もままならない状況で、工事も大幅に遅延となった。このような折しも、昭和五十一年二月には帝国観光株式会社が倒産となった。その後を、同年八月に東京の株式会社蓼科カントリー倶楽部が引き受けたが、同社は一年ほどで昭和五十二年二月に倒産となってしまった。

その後、別会社二～三から借用申し込みがあったが好転せず、平成八年一月の長野県の「ゴルフ場開発総量規制」の条例とも相まって、ついに吉田山の観光開発は断念することになった。平成十一年二月になって、茅野市当局と「美サイクルパーク」として、平成三十年三月三十一日までの賃貸契約を結び、現在(平成十八年)に至っている。

(米沢村村史編纂委員会編集 米沢地区コミュニティ推進会議発行
「米沢村村史」から抜粋)

市民の森を歩くと、あちこちにゴルフ場開発の痕跡が残っているのに気づきます。

里山の再生には長い時間がかかります。じっくり時間をかけて手入れをし、みんなが集い、憩う場となる里山として、子供たちにバトンタッチしていきましょう。

(注):草木の茎や葉を刈ってそのまま田畑に敷きこんで地中において腐らせることで堆肥とする方法

現在の埴原田から北八ヶ岳

